

The Mext GP project

出会い・試し・気づき・つなぐ芸術文化教育—ものに語る連鎖型創造授業— 現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)実施状況報告

富山大学芸術文化学部教授 小松 研治



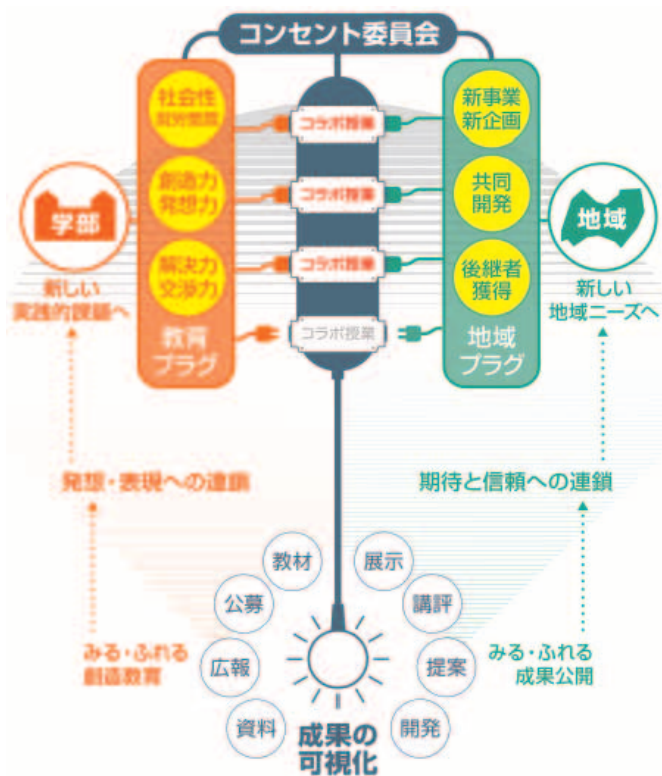
1. 取組の経緯・背景

富山大学芸術文化学部の前身である高岡短期大学では、連続性のある3件の特色・現代GP事業を実施し、「作り手と使い手の育成」、「連携授業の推進」、「地域観光資源の発掘と発信」など地域と様々な形で連携する仕組みを取り入れてきた。その結果、学生の学ぶ動機付け、問題の発見、達成感を導き、就職意欲を高めるなどの効果をあげた。一方で、連携授業の配置方法、成果の共有、連携と成果の連続性などが問題として認識された。また、芸術文化学部では、「芸術文化に対する感性と幅広い分野の知識・技術を活用し人間と自然や社会との関わりの中で問題を発見し、解決しようとする意欲的な人材の育成」と「地域の幅広い伝統資源を継承し一層発展させることのできる人材の育成」を教育目標にしている。

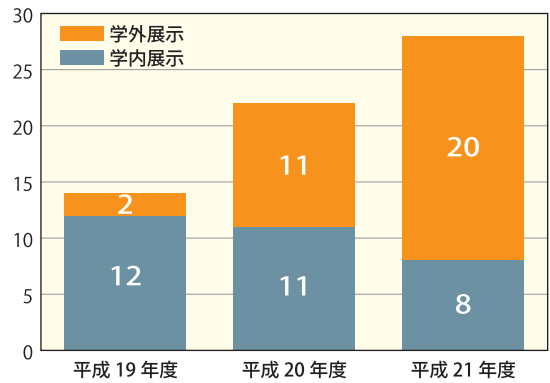
本取組では、上記の問題を解決し、教育目標を達成するために、大学と地域が双方に活用し合う仕組みをつくることとした。その方法として、富山県の伝統産業や地域資源と芸術文化学部の教育資源を、大学の既存授業の中に連携テーマとして取り入れて結び付ける。そしてその成果を公開し共有することで、地域の活性化への貢献と学生の資質向上を図ることを狙いとした。

2. 取組の内容

地域の資源と大学の知識、学生の豊かな創造力を「地域プラグ」、「教育プラグ」として見立て、事業推進組織「コンセント委員会」によって結び付け、コラボレーション授業(コラボ授業)を行った。これらの授業は、4年間のカリキュラムに「出会い・試し・気づき・つなぐ」の連鎖型成長ステップを設定し配置した。成果は具体物として可視化し、発表・評価の場を地域へ拡大する。この一連の流れにより、教育面のみならず、産業や文化面においても、アイデアと連携を生む環境を作る。この取組により、地域と芸術文化教育の「連携と可視による地域キャンパス化」を目指した。(下図)



コラボ授業関連展示数



**1) 推進体制：地域の「資」＋大学の「知」＋学生の「創」
多様なプラグの配線**

- コンセント委員会が、外部との調整、各種ガイドライン（著作権等）整備など事業全体を推進
- 運営企画委員会、運営諮問委員会など、外部委員を含む総括・評価委員会を開催
- GP 事務局を設置し、物品管理、情報管理、コラボ授業支援など、事業全体を支援

**2) 連鎖型教育課程：「出会い」＋「試し」＋「気づき」
＋「つなぐ」4ステップの連鎖型創造授業**

- 学生の社会的な成長段階を、「出会い・試し・気づき・つなぐ」の4つの成長ステップに段階化
- 地域との連携内容によって、各コラボ授業を4年間の教育課程の隅々に配置
- 学生の履修に応じて、個々のコラボ授業が成長ステップ上で教育的な連鎖を実現

3) 可視化：「みる」「ふれる」「ものに語らせる」教育成果の可視化推進

- コラボ授業による学生作品や企画などの教育成果の発表
- 教材や参考資料の展示と教育環境の整備が次なる発想を誘発

4) 共有化：学部全スタッフと学生・そして地域への合意形成と情報共有

- 既存授業を生かすコラボ授業づくりと負担の少ない連鎖システムへの合意形成
- GP スペースや大型モニターによる授業内容や取組状況の公開
- GP 日より、GP ニュース、SNS など多様なメディアを活用した不断の情報提供

3. 取組の成果や評価、人材養成面での達成度

1) コラボレーション授業（連携の実現）

本取り組みでは、平成 19 年度～平成 21 年度に 106 件のコラボ授業を実施した。コラボ授業参加学生数は、延べ 3,417 名、教員数は 47 名、実習や見学先は 51 カ所、連携先数は 111 件で連携協力者は 150 名を超えた。参加学生の多さを鑑みると、学生はなんらかの授業により地域や外部との関わりを持つ複数の機会を得たことがわかる。授業内容では、学外での実習や見学、具体的な連携制作を企画する授業が増加したことが特徴的である。

2) 授業成果の展示と可視化環境（可視化の成果）

授業の成果をより広く地域へ還元することを目指し、半期ごとのコラボ授業成果展、21 年度前期までの授業を一斉展示した「コンセント&プラグ展」を実施した。また、個々の授業担当者による個別授業展も数多く実施された（上図）。学生アンケートによれば、展示による第三者からの評価は学生のやりがいや積極性につながっている。また、教員が教材を可視化し学内に配置したり、授業成果を地域へ還元したりする経験により、地域キャンパス化を進める機運が生まれつつある。

3) 履修モデル分析（4つの履修モデル）

任意に選んだ 25 名の学生の既履修コラボ授業を成長ステップ上に再配置し、学部のコース（造形芸術、デザイン工芸、デザイン情報、造形建築科学、文化マネジメント）の専門領域とあわせその分布を俯瞰したところ、4つの学生履修モデル（視覚伝達・メディア系、ものづくり系、建築・設計・インテリア系、文化マネジメント系）に大別することができた。学生たちは自分の専門的授業のみならず、他領域の科目を専門関連科目にうまく位置付けていた。つまり、多彩な領域のコラボ授業は、時に専門科目として、時には関連科目として多機能に連鎖したことが確認できた。



4) 高い就職率を達成

本学部は、4年制の芸術系学部として、平成21年度に第1回の卒業生を送り出すことができた。当初は学生の就職への関心が比較的低いのではないかと危惧されていたが、平成22年3月時点で、就職率は95.5%であった。学生へのインタビューや授業ごとのアンケートでも、コラボ授業を通して、多様な社会人と出会い、さまざまなことを試すことにより、自分の適性に気づいたり、就業意識が高まったりなど、本取組が学生にとって社会に踏み出す一助となったことがわかる。

4. 学内からの評価、教育改革への影響等

1) 学生アンケート（連携授業直後）

授業ごとに「出会い・試し・気づき・つながり」の4つの項目について自由記述での書面調査を行った。回収した1,562枚（回収率66.8%）の記述内容を、4項目ごとに肯定的な内容か否定的か（無回答は否定でカウント）で集計した。その結果、80%を超える肯定的な意見を得ることができた。内容を4項目別に整理すると、地域や講師・新しい素材・多様な価値観・仲間との「出会い」、新たな視点・新しい技術を使った制作の「試し」、問題の難しさ・地域の現状に対する「気づき」、将来の進路・制作意欲・学習の楽しさ・地域と自分に「つながる」などが、浮かび上がった。

2) 学生アンケート（コンセント&プラグ展時）

平成21年12月に実施した、授業成果一斉展示「コンセント&プラグ展」をみた学生アンケートによると、「作品から刺激をうけ、やる気がでた」、「履修しなかった授業へ興味を持った」など大学の授業への関心を深めたと思われるものや、「社会を知り、学ぶことが多かった」、「これから地域と結びつくきっかけとなった」など学生自らが次なる展開に踏み出す土台として評価されていた。

3) 学生インタビュー

取組全体について24名の学生へ記述式と直接インタビューを実施した。「新しい価値観をもらった」、「プロに出会えた経験を生かしたい」、「より深く考える大切さに気付いた」、「将来の進路につながる」など、関心の広がり、将来へのつながり、学ぶ意欲を導き高める効果があったと判断することができた。

5. 学外からの評価、波及効果等

1) 第三者評価

他大学の教授らからは、学生への教育のみならずFDの視点からも価値があることや、学生が自ら学ぶ環境づくりへとつながる可能性があること、そして、大学からみた事業推進方法や組織、継続面の有効性は、他大学の参考になるとの評価を受けた。また、運営企画委員会の地域委員からは、組織的にこの規模で地域と連携し授業成果を公開・展示した点が高く評価できるとされた。

2) 地域住民・連携先評価と波及

展示発表会などで集めたアンケート調査では、「大学がより身近になった」、「大学が地域に根づく必要な取組である」、「今後の地域連携を進めることに期待する」とするものが多かった。一方で、せっかくよい取組なのに、もっと広報する必要があるという意見も少なくなかった。今回の取組をきっかけに、現在も新たな連携授業の要望や打診が寄せられており、一部実施が検討されている。

3) 取組への関心（各種メディア）

本取組に関する新聞やテレビ、雑誌・タウン誌など各種メディアで取り上げられた。平成19年度3件、20年度51件、21年度33件の合計87件に上る。



6. 今後の展望、課題

本取組の極めて重要な成果である地域連携の多様化をさらに継続・推進するために、学外からの依頼は本学社会貢献グループの芸術文化系研究協力チームが一括して集約・整理して、研究プロジェクト会議において一覧表で周知し、教育・研究とマッチングさせる仕組みを構築した。事業終了後の現在、47件の地域連携プロジェクトが実施中である。また、「みる」「ふれる」「ものに語らせる」可視化教育の継続として、本学部の映像スタジオを整備し、実技、実験系授業で制作された学生作品や教員の研究成果作品など、年4回の期間を設けて撮影する。そうして蓄積された教育成果のデータを、写真パネルや印刷物、Web等さまざまな場面で活用する。このような仕組みを広報委員会が中心になり提案し教授会で了承された。今後、これらの教育成果を使って、学内、地下芸文ギャラリー、銀行等での展示が継続して可能となり、オープンになった教育や研究成果を介して次の地域連携に結びつくことを目指している。GP事業実施中に整備した展示用備品や大型モニター、簡易展示台等は、芸術文化系研究協力チームや学務グループなどがその管理を引き継ぎ、有効に利用されている。